



Title	メタファーのHighlighting/Hidingに関する認知モデルの考察
Author(s)	竹田, 聖基
Citation	大阪大学言語文化学. 2001, 10, p. 179-192
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78003
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

メタファーの Highlighting / Hiding に関する認知モデルの考察*

竹田 聖基**

Many researchers of metaphor have regarded metaphor's highlighting and hiding as a trivial matter, and relatively few analyses of its mechanism or its cognitive model have been done. The purpose of this paper is to reconsider metaphor's highlighting and hiding in detail, and to propose a new cognitive model of metaphor's highlighting and hiding with a notion of similarity.

Lakoff (1993) defines metaphor as a mapping across two conceptual domains, namely, a target domain and a source domain. He considers that it is based on correspondences in our daily experiences rather than on similarities. Lakoff's view about metaphor is employed in this paper, except for his idea about conceptual metaphors, which he considers are not based on similarity. On the notion of similarity that is closely related to metaphor's highlighting and hiding, Suzuki (1996) suggests three types of similarity, they are, object-level similarity, relation-level similarity, and pragmatic similarity. His three classifications of similarity is introduced in this paper. Also, the importance of the object-level similarity that is considered to play a vital role in metaphor's highlighting and hiding is shown by analyzing some metaphorical expressions.

This paper's cognitive model of metaphor's highlighting and hiding is a modification of the "contrast" model first proposed by Tversky (1977) and then modified by Ortony (1979). The contrast model in which a circle represents a set of attributes cannot explain the difference of salient degrees among the attributes. After indicating the defect of this model, a new model that involves an isosceles triangle instead of a circle is proposed. This new model regards the isosceles triangle as a set of attributes that constructs a notion. In the triangle, the distribution of attributes depends on their salient degrees, that is, the higher it goes in the triangle, the more salient it becomes.

* A Cognitive Model of Metaphor's Highlighting and Hiding (TAKEDA Masaki)

** 言語文化研究科博士後期課程 1 年

It is important to note that there is a borderline on the triangle that divides the salient aspects and the non-salient aspects of a concept. This line is not fixed, but moves up and down flexibly depending on the contexts or daily experiences. In this model, a conceptual mapping is described as an overlap of two triangles. The highlighted aspects of a mapping are in the overlapped part, while the hidden aspects are in non-overlapped parts of the triangles that are salient.

1 はじめに

従来のメタファー研究においては、メタファーの highlighting / hiding という現象の存在自体は認められているものの、highlighting / hiding のしくみに関する詳しい分析やモデルの提示などは十分になされてこなかったように思われる。例えば、Lakoff and Johnson (1980) においては、highlighting / hiding がメタファーにとって当然の現象として受け取られており、より詳細な分析などは一切なされていない。そこで本稿ではメタファーの highlighting / hiding という現象に着目し、類似性の概念を考慮にいれた新しい認知モデルを提案する。さらに、メタファーにおいて軽視されがちであった「対象レベルの類似性」(鈴木 (1996)) がメタファーの highlighting / hiding において重要な役割を果たしていることを、様々なメタファー表現を例にとりて明らかにしていく。

2 メタファーの定義と類似性の概念

2.1 Lakoff と鈴木 のメタファー研究と類似性観

2.1.1 Lakoff のメタファー観と類似性観

本節においては、本稿の理論的枠組となる Lakoff and Johnson (1980)、Lakoff (1993) のメタファー観、並びに類似性観について考察する。Lakoff (1993) によれば、メタファーとは概念領域間の写像であり、メタファーの動機づけとして考えられるのは類似性というよりはむしろ我々の経験における様々な対応であるとしている。さらに、Lakoff and Johnson (1980) においては、メタファーを、我々の文化の一般的な概念体系を構築するメタファー (慣習的なメタファー) と、我々の慣習的な概念体系の枠の外にある想像的かつ創造的なメタファー (非慣習的なメタファー) とに分け、そのうち、より重要なのは慣習的なメタファー¹⁾ であると考えている。本稿では、これらの慣習的なメタフ

¹⁾ Lakoff and Johnson (1980) では、主な慣習的なメタファーとして、構造のメタファー、位置づけのメタファー、存在のメタファーの三つを挙げている。

ーの中でも特に類似性との関連がある構造のメタファーに焦点を当てる。構造のメタファーとは、ある概念に他の概念を用いて構造を与えるものである。「人生は旅である」という構造のメタファーを考えてみると、我々は人生を「長い道のり」で喩えたり、「航路」で喩えたりできる。人生においても「出発点」からスタートし、途中いくつもの「障害物」を乗り越えて「目的地」に辿りつく。このように、「人生」という抽象的な概念が「旅」という概念によって様々な構造を与えられる場合に、構造のメタファー「人生は旅である」が働いていると考える。このような構造のメタファーにおいて Lakoff and Johnson (1980) が重視したのは、構成語の持つ概念構造間の関係であり、その関係同士の類似性²⁾ であるといえる。Lakoff and Johnson (1980)、Lakoff (1993) の類似性観に関しては、芝原 (1995) が有益な批判³⁾ をしている。次節では本稿における類似性観として、鈴木 (1996) の類似性観を見ていく。

2. 1. 2 鈴木 (1996) の類似性観

鈴木 (1996) はアナロジー⁴⁾ に関する類似性を次の三つに分類している。

○対象レベルの類似性：二つの対象の間の類似性。

(例) りんごとみかんの類似性、そっくりさん

○関係レベルの類似性：根源領域に存在する関係と、目標領域に存在する関係の共有の度合いに基づく類似性。

(例) 電流と水流における「xが増加するとyも増加する」という関係の類似性

○プラグマティックな類似性：問題の解法や目標構造レベルでの類似性

(例) 音楽の録音とテレビ番組のビデオ録画の類似性

鈴木は関係レベルの類似性をアナロジーにとってより本質的なものとみなし、対象レベルの類似性を直感的なものとみなしている。というのもアナロジーは個別の類似に基づいているのではなく、構造 (= 関係) のシステムにおける類似または一致に基づいているためである。本稿では、鈴木が提示する3種類の類似性のうち、対象レベルの類似性と関係レベルの類似性の二つを Lakoff の類似性観に代わるものとして採用する。

²⁾ Lakoff (1990) のいういわゆる根源領域と目標領域間のイメージスキーマ構造の類似性である。

³⁾ 芝原 (1995: 179) は「メタファーによって創り出される類似点というものの可能性に焦点を当てるなら、メタファー以外のものによって創り出された類似点に基づくメタファーというものの可能性が探られるのを許すべきである」という点を主張した。その主張を支持すべく、芝原は「関係の錯誤」という概念を導入している。

⁴⁾ 鈴木 (1996) ではアナロジーとメタファーとを特に区別してはいない。(p.18)

2.2 本稿におけるメタファー観と類似性観

本稿においては前述したように、基本的に Lakoff and Johnson (1980)、Lakoff (1993) におけるメタファー観を採用する。「基本的に」という単語を用いたのは、彼らのメタファー観に決定的な誤りが認められるからである。それは、慣習的なメタファー（それ自体は類似性に基づかないメタファーとされる。）による類似性の創造に関するものである。芝原（1995）も指摘しているように、慣習的なメタファーにおいても、類似性に基づくメタファーの存在が認められている。しかしながら、彼らのメタファー観の全てが否定的なものになったのではなく、メタファーの定義や、特に重要視した慣習的なメタファーの分類に関しては今後の研究においても十分に利用価値があると考えられる。本稿ではメタファーを我々の概念領域間（根源領域と目標領域）における写像とし、写像の動機として、類似性の概念が働いているものとする。類似性観に関しては、主に鈴木（1996）の「対象レベルの類似性」、「関係レベルの類似性」の概念を採用し、さらに大森（1992）の類似性観⁵⁾に基づいた考えも取り入れ、メタファーに関する類似性とは、ある二つの物体の物理的、客観的な属性における類似性ではなく、我々の心の中にある概念間に見られる類似性であると定義する。次節では具体的なメタファー表現を例に取り、メタファーの highlighting / hiding においては、従来の研究において軽視されてきた対象レベルの類似性が重要になることを明らかにしていく。

3 様々なメタファー表現に見る highlighting / hiding

3.1 メタファーの highlighting / hiding の定義

メタファーの highlighting / hiding はメタファーの重要な特性としてとらえられてきたにもかかわらず、これまでに十分な研究がなされてきたとは言にくい。本節においては、類似性の概念を用いて様々なメタファー表現において際立っている側面、また同時に隠れている側面⁶⁾について考察する。最終的には関係レベルの類似性と同様に、対象レベルの類似性も重要な役割を果たしていることを示す。

まず、メタファーの highlighting / hiding に深く関わっている、ある概念における顕在的な側面と潜在的な側面の定義から始める。「サッカー」という言葉を聞いてどのような側面が想起されるであろうか。「激しくて危険」、「普遍的なスポーツ」といった側面を想起する人がいれば、「代表チーム」や「ボール」そのものを想起する人もいるかも

⁵⁾ 「メタファーは類似性に基づくということが出来る。ただしここで言う類似性とは、外界の二つの物体の物理的性質に客観的に存在する類似性を意味するのではない。人間が事物を知覚し、認識することによって得た心的構成物（概念）に見られる類似性である。」（大森 1992：62）

⁶⁾ ここでいう側面（特性）とは、ある概念の素性のみならず、より複雑な関係や、イメージをも含むもの。

しれない。このように比較的容易に想起できる概念の側面を、その概念の顕在的な側面ということにする。一方、想起することが困難、もしくは不可能なサッカーの側面もあり、例えば、「試合には3人の審判が必要」というような側面である。このような側面を、その概念の潜在的な側面ということにする。これらの顕在的（潜在的）な側面に関して重要な点は、ある側面がある概念において一番顕在的（潜在的）であるということ、その側面がその概念において一番重要である（重要でない）ということの意味しない、ということである。ここでの顕在性とは、ある側面がどれだけ容易に想起されるのかという「想起容易性」とでもいうべきもののみを指している。従って、同一人物であっても、文脈によって、「サッカー」という概念の一番顕在的な側面に「ボール」を挙げることもあれば、「代表チーム」を挙げることもあるのである。もちろん、ある概念の顕在的な側面は人によって異なる場合も考えられる。

一旦、二つの概念領域間で写像が行われると、両概念の顕在的な側面、潜在的な側面が重要な役割を果たす。「サッカーは戦争である。」という発話を耳にすれば、普通、「サッカーは危険で激しいもの」という意味がまず考えられる。この場合、危険さ、激しさという、サッカー、戦争の両概念において顕在的な側面がこのメタファー表現において際立っていると考えられる。また、殺し合いという戦争において顕在的な側面であり、サッカーにおいては潜在的な側面が際立つということも考えられる。サッカーの盛んな国のプロリーグでは、成績が悪い3、4チームが下部のリーグに降格されるのであるが、リーグの終盤戦において下位チーム同士の対戦になると、まさに殺し合いといえるほど壮絶な試合内容となる。この様な解釈は、サッカーの概念に戦争の概念の一部を発見するというメタファーによる概念の拡張の例の一つとして考えられる。一方、協定を結ぶという戦争において顕在的な側面はサッカーの顕在的な側面ではなく、隠れたままである。またサッカーのボールを蹴るという顕在的な側面も戦争の顕在的な側面には見られず、隠れている。では、戦争、サッカーの両概念において潜在的な側面がメタファーによって隠されるということは起こりうるであろうか。筆者はそのようなことはないと考ええる。というのも、「隠す」という行為は、元々目に見えたもの（意識できたもの）を見えなくする（意識させなくする）行為なのであり、メタファーの *hiding* においても、隠される側面は、元々目に見えたもの（意識できたもの）、つまり、顕在的な側面に限られるはずであると考えからである。本稿では、以下のようにメタファーの *highlighting* / *hiding* を定義する。

highlighting : 根源領域の顕在的な側面と目標領域の顕在的な側面、もしくは、根源領域の顕在的な側面と目標領域の潜在的な側面との間で共通する側面の際立ち

hiding : 根源領域の顕在的な側面と目標領域の顕在的な側面との間で共通しない側面の隠れ

次節ではより具体的なメタファー表現を例に取り、従来のメタファー研究で軽視されてきた対象レベルの類似性が、メタファーの highlighting / hiding においては、関係レベルの類似性と同等に重要な役割を果たしていることを明らかにしていく。

3.2 サッカー、人生に関する表現に見る highlighting / hiding

サッカーは世界中で行われている普遍的なスポーツであり、このサッカーの持つ普遍性という特徴によって、同じく普遍性を持つと考えられているメタファー（他の認知的方略を含む）とサッカーとを結び付けることができる⁷⁾。まずは「サッカーは戦争である」という構造のメタファーから派生したと思われるメタファー表現を見てみる。

「欧州の戦場」／「渾身の近距離砲」／「スループスが武器になる。」／

「波状攻撃」／「敵を罠にかけた。」／「ケガで戦列を離れる。」

これらの表現を見てみると、戦争の様々な側面がサッカーに写像され、サッカーが新たな視点から理解されていることがわかる。まず「欧州の戦場」では、欧州におけるサッカーの、激しく、熱狂的で危険な雰囲気と、戦場における激しく生命にかかわるほどに危険な雰囲気という対象レベルの類似性が際立っている。次の「近距離砲」という表現でも近距離で放たれたシュートの強烈さと近距離砲の威力の大きさといった対象レベルの類似性が際立っている。「スループスが武器になる」という表現では、得点に即つながらスループスの危険性と、武器の持つ死へとつながる危険性が際立っている。「波状攻撃」に関しては、新たなメタファー「攻撃は波である」が必要になる。波の持つ特性の中でも、継続性、つまり波には終わりがなく、いつまでも寄せては返し続けるという点が際立っていると考えられる。サッカーにおいて我々が波状攻撃という言葉を使うのは、一方のチームがもう一方のチームを攻撃していて、その攻撃が何度も何度もくり返される時である。この場合もやはり、対象レベルの類似性が際立っていると考えられる。最後の「敵を罠にかけた」という表現では「だまし」という戦争における罠の特性が際立っていて、それはやはり対象レベルの類似性と言える。最後の例の「戦列」においても、サッカーのチームと、戦争におけるある部隊との間の対象レベルの類似性が際

⁷⁾ サッカーと認知的な方略との関わりについては、Takeda (2000 : 47-50) を参照。また、他の多くのスポーツにおいても認知的な方略との関連が認められる。

⁸⁾ 上に挙げた例以外にも、「ハーモニーを奏でる。」、「攻撃のリズムを奏でる。」などのサッカーと音楽に関するメタファー表現、さらに、「試合の流れを変える。」、「チームに合流する。」などのサッカーと流れに関するメタファー表現など、さまざまな種類のメタファー表現が見られるが、際立っている特性はその殆どが対象レベルの類似性であった。(Takeda, 2000 : 60-9)

立っているといえる⁸⁾。

次に人生に関する様々なメタファー表現を見ていく。

「人生、雨のち晴れ。」／「人生の最終章」／「君の大事な人が単なる脚注に変わった。」

「人生、雨のち晴れ。」というメタファー表現は「人生は天候である」というメタファーに由来するものと考えられる。一般的に我々は良い天気をなにか良いことの兆候とみなし、悪い天気をなにか悪いことの兆候とみなす傾向がある。人生にはいい時があれば悪い時もある。いい時には幸せであったり快適であったりする一方で、悪い時には不幸せであったり不快であったりする。このような側面が人生と天候との写像において際立っていると考えられる。これらの快、不快、もしくは良い、悪いという両概念において共有されている特性は対象レベルの類似性である。「人生の最終章」や「君の大事な人が単なる脚注にか変わった。」といった表現は「人生は本である」というメタファーに由来している。本の一般的な特徴として、表紙、目次、本文、背表紙などがある。その中の本文はいくつかの章によって話が分けられており、人生においても、幼年期、青年期、老年期というように人生を年令で分けることができる。「人生の最終章」においては、本が持つ（章などの）分割性が際立っているのがわかる。この場合も対象レベルの類似性が際立っているといえる。次の「君の大事な人が単なる脚注に変わった。」という表現は今までの例とは異なる。この例には「人生は本である」から派生したと考えられる「恋愛は本である」というメタファーが関わっている。この文章の場合、「大事な人」と「脚注」との対象レベルの類似性を考慮にいれても正しく理解することは困難である。この表現を理解するには、脚注と本文との関係をつかむが必要になる。本文の紙面をイメージしてみると、まずテキストが中心にあり、下方に脚注があり、角にはページ数などがある。これらの中で紙面にとって重要なのは、脚注ではなくテキストであるというまでもない。そして、この関係が、「大事な人」と「大事ではない人」との関係に類似していると我々は感じとっているのである。つまりこの例においては、今までの例とは異なり、関係レベルの類似性が際立っていると考えられる。「恋愛は本である」というメタファーにおいては、普通、「脚注」という概念は「大事な人」というよりもむしろ「大事ではない人」に写像される。（脚注はテキストよりも重要ではないから。）「大事な人はテキストである。」というメタファー表現において際立っているのは対象レベルの類似性であるが、上の例では「大事な人」が「脚注」に写像されており、これを理解するには「脚注はテキストにくらべて重要ではない」ことを考慮にいれなければならない。言い換えれば、まず「大事な人」と「テキスト」との間で写像があって、その後に「大事な人」と「脚注」との間に写像がなされるのである。「変

わった」という表現がある種のマーカーとなって、我々に少なくとも二つの対象を考慮に入れなければならないと知らせ、関係レベルの類似性が際立っていると感じさせるのである。

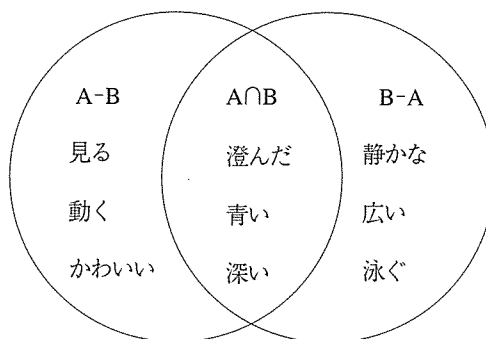
最近のメタファー研究において当然視されているように、メタファーにおける関係レベルの類似性の重要性を強調した Gentner (1983) は、対象レベルの類似性は写像されない (にくい) と考え、その例として、水素原子と太陽系の間の写像を引き合いに出している。水素原子と太陽系の間には、電子が核の周りを周っている関係と、惑星が太陽の周りを回っている関係とが類似しており、核は太陽の様に黄色くはないといった対象レベルの類似性を否定している。しかしながら上で見てきたように、サッカー、人生に関するメタファーにおいては、対象レベルの類似性が際立っていることは明らかである。(もちろん、その際に触れはしなかったが、サッカー、人生に関するメタファー表現において関係レベルの類似性が際立つこともある⁹⁾。従って、メタファーを論じる際には、関係レベルの類似性のみに着目するのではなく、対象レベルの類似性をも考慮に入れる必要があるのである。

4 Highlighting / Hiding の認知モデル

4.1 先行研究の欠点

本稿におけるメタファーの highlighting / hiding の認知的なモデルは Ortony (1979) が提案した類似性認知に関わる集合論的なモデルの欠点を改良したものである。新しい認知モデルを提案する前に、まずは Ortony のモデルを見ていく。Ortony は Tversky (1977) のコントラストモデルと呼ばれるモデルを発展させている。

< Tversky (1977) のコントラストモデルの例 >



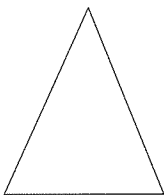
< 図1 > 眼 (A) は湖 (B) だ (楠見、1985)

⁹⁾ 例えば、「渾身の近距離砲」における、シュートを打つ選手とゴールキーパーとの関係と、大砲とその大砲の的になっているものとの関係の類似性などが挙げられる。

図1のようなコントラストモデルでは、二つの対象を特性の集合で表し、両者間の特性対応過程として類似性認知が説明される。二つの対象aとbの特性集合をそれぞれA、Bとすると、ab間の類似性とはAとBの共有特徴集合($A \cap B$)とAとBの示差的集合($A - B$ 、 $B - A$)の対比で表現される。Ortony (1979)は両概念間における共有特性が少なくても類似性が認識され、比喩として理解される点、さらに類似性の非対称性という点などを指摘し、Tverskyの集合モデルを改良した。主な改良点として、両概念の共有特徴の顕著性が主にBにおける顕著性に依存しているという点が挙げられる。例えば、「人生は本である。」というメタファー表現を考えてみると、両概念における共有特性には分割性、線条性が挙げられるであろうが、これらの特性は人生においてというよりも、本において非常に顕著な特性である。従って、「人生」を語る時、「本」を重ねることによって、「本」における複数の特性を同時に際立たせることができる。彼等のモデルにおいては、ある概念を構成する特性の集合を一つの円で示している。しかしながらこのモデルでは、ある概念における様々な特性の顕在性の差というものを表すことができない。この欠点はメタファーのhighlighting / hidingを考察する上で致命的となる。そこで次節からは、この円のモデルに取ってかわる新しいモデルを提案する。

4.2 メタファーのhighlighting / hidingの認知モデル

新しいモデルにおいては、ある概念を構成する特性の集合を、円の代わりに二等辺三角形を用いて表すことにする。二等辺三角形にあって円に無いものといえば、頂点の存在である。三角形には三つの頂点があるが、その中でも二等辺三角形の場合には一つの頂点が際立っているように思われる。二等辺三角形を思い浮かべてみると、おそらく多くの人が図2を思い起こすに違いない。この中で際立っているのは、一番上にある頂点であると考えられる。理由の一つとしては、他の二つの頂点の角度は同じであるのに一つだけ異なるという点が考えられる。また、この図を見てみると、上への方向性が見えてくる（上に向かって伸びている）と思われるが、その方向性もまた、一番上の頂点が際立つ理由の一つとして考えられる。このような二等辺三角形が持つ性質は、ある概念



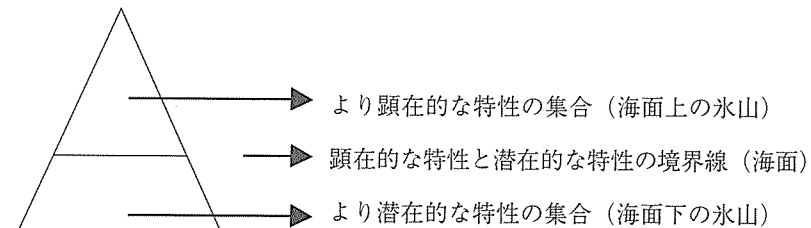
<図2>二等辺三角形のイメージ

の特性の集合においても見られる。ある概念において、集合を成す特性は平均的に分布しているのではない。ある特性は他の特性よりも際立っているだろうし、またある特性は他よりも目立たなかったりするように、特性の顕在性に差があるのである。また、ある概念においては必ず一番顕在的な特性が一つ存在する。我々

がある言葉を聞いて何を想起するかと問われた場合、

我々は普通、順に一つずつしか答えることしかできない。つまり、思い出される特性に順番があるのであり、もちろん一番初めに思い出された特性がその時点で一番顕著な特性といえる。これらの点を考慮に入れると、上図の三角形の一番上の頂点が、ある概念において一番顕著的な特性に相当することが分かる。そして底辺に近付けば近付く程、その特性は目立たなくなり潜在的な特性になっていく。こうして特性の顕在性の差を表すことができる。

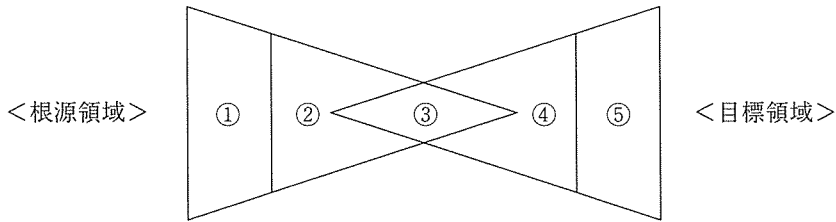
顕在的な特性と潜在的な特性との間には境界線があるということを明らかにするために、北極海などに浮かんでいる氷山を想像してみる。我々は氷山の一部だけが海面よりも上に出ており、残りの部分は海面よりも下にあるという事実を知っている。つまり、氷山において、我々の目に写るのは海面より上に出ている一部のみであり、その部分はより顕在的な部分と言える。これらの概念を上図の三角形に反映させてみると、ある概念には容易に思い起こすことができる部分とできない部分とを分ける境界線が存在するということを想定できる。もちろんこの境界線はきちんと固定されたものではなく、様々な文脈や、多くの経験を重ねることによって変化しうるものである。それはちょうど、海に浮かぶ氷山が波によって絶えず上下に浮き沈みしていることと似ている。ある概念を構成する様々な特性の集合モデルは以下のようになる。



<図3> ある概念を構成する特性の集合モデル

この概念のモデルを用いて、今度はメタファーの highlighting / hiding のモデルを考える。メタファーとは概念領域（根源領域と目標領域）間の写像であるから、上記の概念のモデルを用いれば、メタファーの highlighting / hiding のモデルは下図の様に提示することができる。

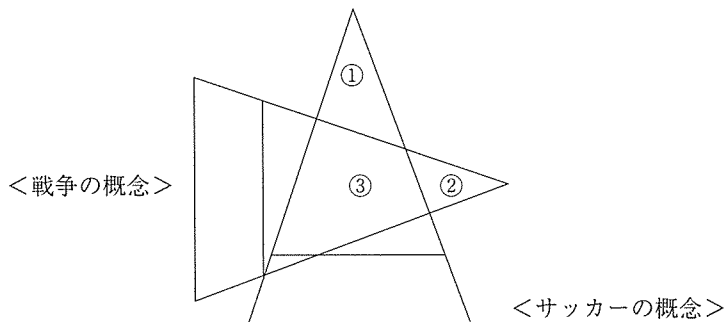
「サッカーは戦争である」というメタファーを考えてみる。この場合、根源領域は戦争の概念、目標領域はサッカーの概念に相当する。戦争の概念の中で顕在的な特性には、危険さ、激しさ、協定を結ぶ、様々な武器などが挙げられる。一方でサッカーの概念に関しては、激しさ、危険性、荒々しさ、ボール、ゴールなどが挙げられる。サッカーと戦争の概念との間で写像が行われると、上図のように概念同士が重なりあう部分③が生まれる。この部分こそがこのメタファーにおいて際立っている特性であり、戦争、



- ①：根源領域の潜在的特性群
- ②：根源領域の顕在的特性群 → 隠れる側面（メタファーの hiding）
- ③：根源領域と目標領域の顕在的特性群 → 際立つ側面（メタファーの highlighting）（根源領域の顕在的特性群と目標領域の潜在的特性群）
- ④：目標領域の顕在的特性群 → 隠れる側面（メタファーの hiding）
- ⑤：目標領域の潜在的特性群

<図4> メタファーの highlighting / hiding のモデル

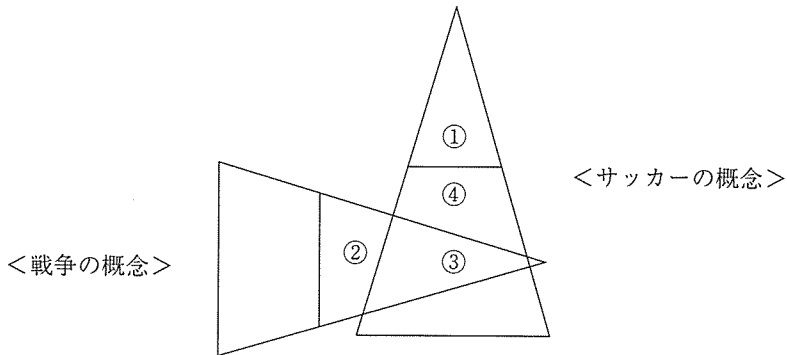
サッカーの例でいえば、激しさ、危険性などがそれに当たる。一方で、隠れている特性はというと、サッカーでいえば、ボールやゴールであり（④）、戦争でいえば、協定を結ぶ、様々な武器などである（②）。サッカーの、フィールドには3人の審判がいる、などという潜在的な特性（⑤）や、戦争の塹壕などという潜在的な特性（①）はメタファーによって隠されるまでもない¹⁰⁾。しかし、図4では、もし戦争の概念の中で、人を殺すことという特性が一番顕在的（つまり三角形の頂点）で、なおかつサッカーの概念の中ではサッカーボールという特性が一番顕在的であるような人の場合、つまり、戦争においてサッカーボールが、サッカーにおいて人を殺すことが顕在的な特性になる、ということになる。これは明らかに誤りである。従って、一番顕在的な特性を共有しない二つの概念間の写像は、下図のようなモデルを考えるべきである。



<図5> 一番顕在的な特性を共有しないメタファーのモデル

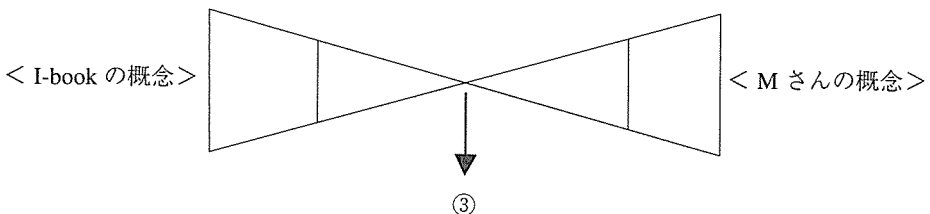
¹⁰⁾ もちろん、ここで挙げられた特性は文脈によって異なるし、人によっても異なる。

こうすれば、たとえお互いの概念の一番顕在的な特性同士が異なっても（①にボール、②に人を殺すという特性が入る。）写像が成功しうることを説明できる。また、このモデルを用いれば概念構造の拡張のプロセスを説明することもできる。前述した、戦争において顕在的な、殺し合いという特性が際立つ例を見てみる。殺し合いという特性はサッカーにおいて潜在的な特性と考えられるのでモデルで表わせば以下のようなになる。



＜図6＞ 新たな側面を発見する際のモデル

この場合、サッカーの概念にとって潜在的であった殺し合いという特性（③）が際立てられることによって、サッカーの新たな一面が発見されることになる。さらに、一番顕在的な特性のみが際立つ例も考えられる。例えば、A君がMさんに「Mさんは僕のI-bookだ。」というような斬新なメタファー表現を発したとする。この発話をした時点でA君はMさんが自分にとって一番大事な存在であるということ（I-bookが自分にとって一番大事であるとして）のみを意味していたとする。この場合、A君にとってのMさんの概念と、I-bookの概念間での写像は下図のようになると考えられる。



＜図7＞ 斬新なメタファーの場合のモデル

この場合、重要なのは二等辺三角形同士の向きではなく、重なっている部分が頂点のみ（③）である、ということである。以上のモデルにおける重なり部分（③）は、様々な経験や知識などによって変化し（つまり、上図のモデルはあくまでも、ある一時

点における両概念の写像の状態を表しており)、固定的なものでは決してない。また、重なる部分がより大きい面積になればなるほど、両概念間において共有されている特性が増えることになり、その各々の特性が結びつき様々な関係が生まれ、そして、より複雑な構造が生じてくると考えられる。

5 おわりに

以上、メタファーの highlighting / hiding に関して、「対象レベルの類似性」の重要性に関する考察と、新しい認知モデルの提案をした。結果として、メタファーの highlighting / hiding に関しては、従来の研究において重視されてきた関係レベルの類似性と同様に対象レベルの類似性も重要であることがわかった。また、一般的に概念の際立つ側面とは、我々がある対象を認知する際に引き起こされる感覚や感情に関わる意味の側面であるとわかった¹¹⁾。一方で、隠れる側面には、際立つ側面を除いた感覚や感情に関わる側面と、辞書的、カテゴリー的な意味の側面¹²⁾の二つが考えられる。本稿で提案した認知モデルは、ある概念を構成する特性の顕在性の差を表すことが出来る点、またメタファーの highlighting / hiding を視覚的に捉えることができるという点において新しく、かつ意味があるモデルと言える。

6 主要参考文献

- Gentner, D. (1983) "Structure-Mapping: A Theoretical Framework for Analogy." *Cognitive Science* :155-170.
- 楠見孝 (1994) 『比喩の処理過程と意味構造』 東京：風間書房
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the mind* University of Chicago Press, Chicago.
- (1990) "The Invariance Hypothesis: is abstract reason based on image-schemas?" *Cognitive Linguistics* 1:39-74.
- (1993) "The Contemporary Theory of Metaphor." in Ortony, A. (ed.) *Metaphor and Thought*. Cambridge University Press, Cambridge. pp.202-51.
- Lakoff, G and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press, Chicago
- 大森文子 (1992) 「言葉の意味の諸側面」『言語文化研究』第 18 号：49-66

¹¹⁾ 楠見 (1994) における「情緒・感覚の意味」、もしくは、大森 (1992) における「知覚内容」と「情緒的評価」とを合わせた概念に相当する。

¹²⁾ 楠見 (1994) における「カテゴリーの意味」に相当する。

Ortony, A. (1979) "Beyond Literal Similarity." *Psychological Review* 86-3 : 161-80.)

芝原宏治 (1995) 『錯誤の意味論』 東京：海鳴社

鈴木宏昭 (1996) 『類似と思考』 東京：共立出版株式会社

Takeda, M. (2000) "An Analysis of Metaphor's Highlighting and Hiding." M.A.Thesis, Osaka University.

Tversky, A. (1977) "Features of Similarity." *Psychological Review* 84-4 : 327-52.